

新分野の展開に期待

第14回セラミド研究会学術集会

第14回セラミド研究会学術集会（五十嵐靖之会長）は10月21・22日、都内の会議場とwebによるハイブリット開催した。学術集会は、京都大学大学院農学研究科の菅原達也氏「スフィンゴ脂質の食理学的研究」など招待講演5題と一般講演13題で構成、ヤング・インベステイニング・アワードは順天堂大学の藤田未麗氏が受賞した。初日集会後に開かれた運営委員会で新会長に木原章雄氏（北大）、副会長に花田賢太郎氏（国立感染症研究所）と向井克之氏（ダイセル）が選出された。



五十嵐靖之氏



木原章雄氏

菅原達也氏は、米国人では動物由来が中心、日本では植物由来セラミドが多くを占める。かつては大腸がん発症抑制などの研究が多かったが、最近は皮膚への効果が注目されているとし、学会報告リストを示した。また、哺乳動物、高等植物、海産品、酵母の化学構造の違いから、アメリカオオイカや醤油粕由来セラミドなど最新研究に言及。さらに、¹³Cラベル化スフィンゴ脂質による消化

★招待講演

能性との作用について
詳細に報告した。

オリザ油化の下田博司
氏は、米由来の各種セラ
ミドの多様な健康機能を
概説するとともに、生体
内でセラミド増加作用を
有するイチゴ種子由來
liroside（フラボノイド
アシル化配糖体）ヒトマ
ト種子由來licoperosid
es（ステロイドサポニ
ン）の健康効果について
多くのデータを示し紹介
した。

順天堂大学かゆみ
センターの高森建二
「かゆみのメカニズム
バリア異常は難治性
を誘導する—」と
がん作用、腸管透
関する作用を見出
る。今回、その作
の一端を紹介する
に、SPMの腸管透
亢進作用を利用す
で、生体に吸収され
い物質の吸収を高め
能性に言及した。

東京農工大学の三浦豊氏は、食事中のスフィンゴ脂質の中でも卵やミルクに多く含まれるスフィンゴミエリン（SPM）の生理機能の最新研究成果を報告した。演者らは培養細胞系や動物モデル

て講演。原因発現ノカニズム、最新治療法までを概説した。かゆみは、月額4千億円の治療費が使われている国民病の一つ。以下、治療には抗ヒ

☆
一般講演

内に移行することをすでに明らかにしている。今回のヒト試験は、60歳～80歳未満の20名を対象とする24週間のプラセボ対照ランダム化二重盲検並行群間比較試験。結果、こんにゃくセラミド群の群内比較で0週目と比較し12週目の実測値で有意な低値であった。さらに層別解析で、こんにゃくセラミド摂取群は脳内β蓄積が相対的に低めの集団において、プラセボ群より有意な低値を示し

済範囲な研究を紹介し、か
ゆみ特有の神経伝達物質
から治療薬開発について
も最新の成果を披露し
た。

スタミン薬しかなく、根本的な治療法の開発が急務の課題となっている。とし、末梢性のかゆみから臓器の炎症に起因する中枢性のかゆみまで、広

能性があり、予防・治療への活用が期待されるとした。

性改善作用など、セラミード関連食品への配合へ向け、参加者の関心を呼ん

用やメラニン生合成による美白作用、さらにBCCについては、ウイルス感染防御作用など新しい知見にも触れた。エラスティックアミドでは、保水・バリア機能に及ぼす作用をヒト表皮3Dモデル細胞で評価し、同成分がオリザセラミドに含まれる成分の中でも極めて高い経皮水分蒸散量（EWL）の抑制が示されたとした。セラミドとあわせ、同社の独自素材である「イチゴ種子エキ

他の1種の遊離型セトロードの分離・精製に成功している。今回は、 β -シトステロールグルコンジド(BSG)およびヒラマティックアミド(ceramide [AP])の角層セトロード増加による保湿作用

性改善作用など、セラミド関連食品への配合へ向け、参加者の関心を呼びだ。